燎原

京都の民主運動史を語る会　会報　題字　住谷悦治

代　表　岩井忠熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕

口座番号01060=7=15762

加入者名　燎原社

旧山陰街道・樫原　　画　蓮佛　亨

生涯を労働者として「平和」（完）　田中　豊蔵

田中豊蔵氏の連載を終って　T・I

断　想　源　照子

最後の突撃　堀江　保次

紹介　湯浅　晃『戦後京都労働運動の歴史』　岩井　忠熊

総会報告

編集後記

生涯を労働者として「平和」（完）

田中　豊蔵

一、敗戦で日通へ

敗戦で兵隊から京都へ帰った私は、翌日から働き口をさがしにまわりました。

今度は大手をふって京都で働けます。喜びで心はいっぱいです。

近所へ京都新聞を借りにゆき広告を見て元陸軍弾薬庫に米軍の弾薬を運び込む仕事が出ています。わずかの人で締切です。あわてて私は翌日一番に日通組の運送店に行きました。朝七時になつかしい梅小路駅前の日通運送ＫＫです。朝八時から戸が開きますから一時間早すぎます。

守衛さんに、「兵隊から除隊したあくる日から働かなければ生活ができません。どうかよろしくお願いします」と言ってあいさつしたら、

「昨日帰ったのにもう今日から働かなければならんのか、そら気の毒なことだ」と同情してくれました。

また、私は元梅小路駅で働いている人間で友人もおります。

時間がきたので並びました。守衛さんは、「この人は七時から待ってもらっております」と言ってくれました。

日通の役員は「せっかくだがもう人員は満員なのだ……しかし補欠として経験もあるのだしあと一人くらいはよかろう」と一人だけくり入れてくれました。そのあとの大多数の人はだめでした。

翌日私は一番列車を駅で待っておりました。もうマッカーサー司令部の進駐軍は京都市に来ておりました。

汽車が駅につくと、白人は少なく二世の日本人と黒人の兵士がプラットホームで汽車を待っているのです。

私は終戦で除隊してきたものとわかったらしく、色々話をしましたが、家が貧しいこと、パパやママのことを英語まじりにしゃべると二世も黒人兵も同情してくれました。たばこやチョコレートなどもくれました。昼間の缶詰もくれて、「明日から働きにくるように」ということになったのです。

仕事は弾薬を空になった倉庫に運び入れる仕事です。黒人兵の方は算数が弱いのです。私は数字のかけ算を教えてやりました。

黒人兵は「ベリーナイス、ベリーナイス」と言い私の親切さに感激していました。

そして私に「ハロー、ツモローカモン」と言ってくれました。

私は汽車の定期をかい奈良線の祝園に毎日通勤しました。終戦を迎えてはじめて祝園駅で働くことができました。

戦争中は京都府特高課にさんざんにらまれ、七条署員に尾行され、せっかく仕事にありついたら仕事先で妨害され、それで首切りになり苦しい生活をしなければなりませんでした。

思えば誠に残念なことでした。

終戦になった、これで自由に働けます。

仕事は祝園の弾薬庫の仕事でしたから戦争の後始末ですが、とにかく明日から伸び伸びと働けるようになったのです。こんな喜びはたとえようがありません。

こうして、約一か月ほど働いておりました。ところが、突然私のところに昌運工作所の技術者から「日本紡績で大きな仕事ができたから君の力をかしてくれないか」ということです。弾薬庫では慣れた仕事ではありますが、伊藤忠の技術部の申し出だし、賃金は受取制です。日通組より金もうけが倍になります。それで伊藤忠さんの仕事に行くことになり、京都府下の大山崎駅のところの日本紡績ＫＫに行くことに決めました。

二、日本紡績の仕事

日本紡績ＫＫでは大きな機械を据え付けます。そのためにたくさんの仕事師がおりますが一〇トンからのロールフレームを動かすのはなかなか難しいのです。私が伊藤忠さんに提案して五トンのチェンボロッコとジャッキ、ワイヤーボロッコ等を買ってもらうよう言いました。

伊藤忠さんは私の要望を受け入れて五トンのチェンボロッコ等を買入れてくれました。

それで大阪の知人に来てもらって、二人で力を合わせて仕事をしました。

すると、この人の不足している時でしたが、会社の人夫をたのんで運搬の仕事も手伝ってくれました。

地上五〇尺もある機械です。会

社の重役も技術者も出て来てみんな見ております。みんなが固唾をのんで見守る中、私は大阪から頼んだ友人とともに力を合わせて大屋根の張りにワイヤーをかけました。

そしてワイヤーが切れてもチェンボロッコが下に落ちないように注意しながら、ジウリジワリと機械を動かしました。

下の機械に油を流して、チェンボロッコを巻いたのです。一〇トンからのフレームローラーです。上のワイヤーを心配しながら手すりの上にあがってチェーンを巻きました。

ところが、どうしても動きません。私はまた、下に降りてテコと油をしゅまして右に回し左に回して、一寸の動きに気を配り油がしゅんでいくだけ動かしていきました。上にあがって一寸、油を流しては二寸、下に降りては一寸、二寸三寸と巻きあげながらテコでこぜて回していきました。

大阪の友人も力を入れて動かします。二人はうまく気があいまして、とうとうフレームロール付きの一〇トンの機械の方向転換ができました。

会社の重役も技術者も組の親方も私たちの仕事ぶりを見てビックリしていました。

私はカネ尺で中心を出し、水平も見て、会社の役員にも見てもらいました。

「OK」です。

私はまた手すりの上にのぼって下を見たらビックリしました。ちょっと身体を動かそうものなら下に落ちます。危ない命がけの仕事です。今度は大屋根のチェンボロッコの取りはずしです。

これも二人共同ですが、ハラハラする仕事です。ボロッコにロープを付けて下に降ろしました。二階の踊り場にチェンボロッコが落ちましたがその時はロープのおかげで止まりました。有難かったです。

解体して一つひとつやっていけば三、四日はかかる仕事です。これを一日でやってしまったので会社の人々は拍手喝采です。

「よくやってくれた!!」

「技術者では考えられんことをやるものだ!!」と言って感心してくれました。

そして伊藤忠の重役さんは、

「よくやってくれた」と、二人に十円札を一枚ずつくれました。今まで十円札をもらったことはありません。

社外からも見学に来てみてくれており、会社も組の親方も、

「高い所の仕事だから、フレームを解体してやるものだと思っておったのに組立てたままにしてやるのだからビックリした。みごとな仕事だ」とほめられました。

「上にあがる手すりの上でふらふらとしたら生命はないと心配した。こんな仕事師は初めてだ、えらいやつじゃ」

と、みんなの前でほめてくれたのです。

三、日本共産党入党

一九四七（昭和二二）年、中国やソ連からの引き上げが始まりました。

舞鶴港へ上陸した元日本兵や抑留者は、心からの疲れと栄養失調でフラフラの人が多く、実に気の毒な様子でした。

日本に帰国し、故郷の父母兄弟に再会できると大きな希望と喜びを持って帰ります。

私たちは委任状を持って京都駅まで迎えに行きました。

石川県、富山県方面に帰還する兵隊と、一路東京方面に帰還する兵隊とが互いに永年の苦労を味わい、辛い抑留生活を胸に秘め、また新たな日本への上陸でお互いに別れ別れになるということで、嬉しいやら悲しいやら、右と左にバラバラになりました。

それらの人々は駅前広場に出て大きなデモンストレーションを行うのです。

このとき京都府の日本共産党員や関係者も彼らを激励するために出迎えに行きました。

ソ連からの帰還者は手に手に赤旗を持って出迎えの労働者に握手をし抱き合って喜びました。

東九条から行ったのは勝山周一さん、佐々木駒蔵さん、そして私田中豊蔵です。

伏見から二人、日本共産党の府委員会の人が十人余、当時は出迎えが少ないのでがっかりしました。

それでも毎日毎日、ソ連からの引揚者で京都駅は大変な騒ぎでした。

夜しか出られない私たち、動員の弱さを嘆きました。

そして私は勝山さんに言いました。

「党を大きくして九条に診療所を設立して、政治的にも思想的にも大きな力をつけなければならない」

この時に私は勝山さんの紹介で、初めて日本共産党に入党することができたのです。

私は今までにいろいろな運動をやってきました。そして仕事にもついてきました。そしてその中で、日本共産党は希望の星であ

り、あこがれの的でありました。

しかし戦前の非合法下では尊敬しながら、またその指導を受けながら、「入ったら仕事を奪われ、さては殺されるかもしれない」と考えて臆病にもよう入らずにいました日本共産党です。

私は今は、天下晴れての共産党員です。

この永年の憧れであり、永遠の夢が実現できたことは大きな喜びです。本当にバンザイ、バンザイでした。

これからは、生涯を労働者として、共産党員として、みんなと団結し党員を増やそうと決意をしました。

（湯浅貞夫氏の整理された原稿はここで終っている。編集部）

田中豊蔵氏の連載を終って

手もとにある『燎原』をくってみると一〇三号（一九九五年一二月）から田中氏の「船乗り」が始まっている。以来、多少の断絶はあったが、この号まで実に一五号、足かけ四年にわたる連載であった。この間に九六年には湯浅氏が亡くなられ、田中氏も昨九八年に九四歳の長い生涯をとじられた。いま編集子の手もとには、湯浅氏が整理されたと思われる原稿が残されている。晩年の田中氏は虫眼鏡を使って自分史としてまとめられたという。苦心の作である。編集子へも田中氏からのハガキがよせられたが、さすがに晩年は字もやや乱れていた。湯浅氏は印刷にまわせるようにその原稿を整理しておかれたのだろう。その原稿もこの号で終わった。

田中氏は一九二一年、一八歳で外国航路の船員になられた。当時、船員は外国で見聞を広め、労働運動に接触する機会もあった。このような船員生活の経験の中で、田中氏は労働者としての自覚を深め、同年には神戸の川崎造船所ストライキという、戦前労働運動史上の画期的な大争議の応援に加わり、労働運動の主要なリーダーに知られるようになる。しかし徴兵年齢に達すると下船し、家業の運輸業（車力）を手伝いながら、兵役の後にはようやく動きだした京都の無産運動に参加した。評議会や労農党の指導下にあったといえる。その経過のなかで泉隆らの共産党員を知り、田中氏は彼らの活動を外部から援助し、無産青年同盟に参加するようになった。こうして一九二八年の三・一五事件では非党員でありながら検挙され、残虐な拷問を受けている。しかし党員であることを否認し続け（事実そうではなかった）、結局は釈放となった。

それからの田中氏は一労働者として家業に従事し、家族の生活を守りながら、いつも左派社会運動の一翼に身を置くことになる。一九三〇・三一年ごろには中国への出兵に反対する闘争に参加した。兵役の体験を生かし、兵舎に入り込んで反戦ビラをまくという命がけの闘争である。しかしこのような運動も、指導的な影響力をもった共産党が弾圧され、有力な活動家が逮捕されていくと、しだいに困難になった。田中氏はそのような情勢のもとでも、あらゆる合法的な可能性を追求して、左派としての活動をあきらめない。一九三六年には陶化学区の学区会議員選挙に出馬して当選した。地方政治史のなかで学区会の果たした役割はまだ未解明のまま残されている。

すぐに社会大衆党は「反ファシズム・反共産主義・反資本主義」の三反主義をとなえて右傾化していた。田中氏は世界的な人民戦線運動の一翼をめざして一九三七年、盧溝橋事件の直前に日本無産党ができると参加し、同年一二月に検挙され三か月留置されている。戦時下、あらゆる運動が押さえられてしまった中で、田中氏は家族の生活の責任をおって、大阪の工場や運送会社を転々と働いたが、行く先にはいつも京都府警の特高が尾行し、職場にも現われた。思想警察の執拗さには驚くばかりである。戦争末期、田中氏は召集されて和歌山県の山中で終戦を迎える。軍隊でも要注意人物だった田中氏は、上官からも「貴様らのよき日が来た」と祝福された。

世に社会運動史も多い。また労働運動史もあまた刊行されてきた。しかしひとりの労働者がそうした運動にかかわって生涯を語った、いわゆる「自分史」はかならずしも多くない。連載した田中豊蔵氏の文章には大正末から戦後にいたる戦闘的・自覚的労働者が歩んだ苦難の道を赤裸々に語っている点で類の少ない貴重な回顧となっている。いわゆる運動史は経過や評価については関心をはらうが、その渦中にあった労働者がどう考え、何にぶつかったのか、周囲の人々がその活動をどのように受けとめたのか、とくに家族がどう反応したかについてはふれていない。こうした文章を読んでもう一度運動史をふりかえることで、その内容が生きいきとしてくるのではなかろうか。

それにしても田中氏の記憶が何十年も前の古くこまかいことに及んでおられるのには驚く。もちろ

ん晩年の回顧であるから、時に記憶ちがいや事実の誤認もまじっているであろうことは、さけがたい。その点は必要に応じてわれわれが再調査すべき課題であろう。しかしひとりの労働者がかく考えかく生きたということは争えぬ真実といわねばならない。

運動史はおおむね内務省・司法省の公的な記録や新聞雑誌類および運動の指導者たちの回顧等に依拠してかかれている。もちろんそれらもだいじだが、取締当局の見方、検閲下の言論機関、自己弁護のまじりやすい回顧だけに頼っていては、本当に後世に役立つ文献、これから先人のあとに続こうと思う者のかてになる運動史にはなりにくいのではなかろうか。

（T・I）

断想

源　照子

燎原一一月号が届きました。早速読み学ぶことが多々あり、有難く思っています。ほとんど同年代の秋田美枝さんの記事は、同志社女専でのことが述べられており、なつかしく読ませていただきました。といっても、私は女専ではなく高女部（普通学部）だけなのですが、講堂や校庭は共通なので、赤煉瓦造りの建物は今も変らずにあり、少女時代を思い出すことになるきっかけになります（今出川通り、河原町から烏丸までの間）。

在学当時、創立五〇周年記念行事があり、大学の中にあるチャペルへ行き、ステンドグラスの明かり窓を珍しく思ってみながら、ハワイ教会から堀牧師が来られたから聴講に行けということで、大学の構内へ行き、そのときは「ツァラトゥストラとイエス」という演題でしたが、何がイエスキリストと関係するのかも理解できずにすごしました。「鎖につながれた鷲」という比喩が表わす意図も理解できず、普通学部五年を終えました。弟や妹がいるので学資が嵩むので女専へは進まず、就職の途としてタイプライティングをＹＷＣＡに習いに行きました。英語は読めても作文はできず、中途半端な段階でした。トナリの国の朝鮮や中国語も聞いても理解できず、指先だけがタイプライターのキーを覚えて印書するわけです。ドイツ語、ラテン語、フランス語、チンプンカンプン。それぞれを習うこともなく、世界共通語として作られたエスペラント（希望する者の意）に魅力を感じ、ＹＭＣＡ（三条高倉角）へ講習を受けに通い、一週間で文法は習ったけど、通信相手はなく、日本エスペラント協会の発行する雑誌を購読しました。へたなおとぎ噺などで実用化の努力を私はやらなかったのでした。何十年も私の書架の片すみに並べられたまま今日に至っています。

父は大正リベラリスト?で、信守という名を好まず、息子に進興（すすんでおこす意）をつけました。が、彼は気管支喘息の持病があり、どんな職業が適当か迷った末、紹介する人があって伏見稲荷の神主さんになりました。三宝にお供物をし、榊をふってのりとをあげる、その資格を得るため皇典考究所を経、国学院（大学?）を経て北野の平野神社の神主さんになりました。そして国学の四大人といわれる荷田春満（東丸）神社（伏見稲荷の南にある）の責任者になり（現在故人です。夫人もいません。息子が神奈川在住です）、家もそのとなりに持ちました。私はそこから日本電気計器（日本軍国主義時代、軍艦造りに計器がたくさん要り、その計器の文字盤書き）に就職しました。会社が軍需景気で発展して二条川端から伏見城南宮前に移転したので、毎日東寺から近鉄に乗って通いました（1年後退職。現在在宅主婦）。

配達、集金なども今はやっていません。

街頭演説をしたこともありますが、最近は「聴衆」の数の中です。

ある時、このようなことを考えました。

「赤旗は嫌いだと思っている方々に、そのわけを教えていただけたら有難いと思います」と書いたポスターをたくさん貼り出してその反響を見る。「嫌いだから嫌いだ」と理由の言えない人が多いでしょうが、なかには「これこれだから」と日本の国の歴史を尊ぶべきことを「教え」てくれる人もあるでしょう。これは半世紀も昔の考えそのもので社会が進歩していることが反映していません。日本が戦争に突入し、その非常識か

ら敗戦の憂き目に遭ったことを省みれば、日本を救う道は現実に即し、中小企業農業漁業を栄えさせ、食料自給の可能性に確信を持った上での貿易。外国依存でなく独立日本の目標を明示する世界平和の道だと知ってもらう手だてを、順次ポスターや掲示板に掲げる努力を要します。候補者の顔だけでなく、政策や経済解説など短文で通行人の印象に残るスローガンを、と。

最後の突撃

堀江　保次

昭和一九年二月一一日応召以来中国の戦線で二回の突撃体験をしてきた。

第一回の体験は夜間行軍中に部落にさしかかった時、敵と遭遇して不意をつかれた。

暗夜の中での交戦中、我が分隊に部落の中に突入せよとの命を受けて決行した。部落の中に突入するや敵の一斉猛射を浴びた。やがて夜明けとなり、ふと足元を見ると分隊の補充初年兵が敵弾に命中され無残な戦死の姿を目前にした。それ以来敵と交戦するたびに願わくば我が分隊に突撃命令の下ることの無い日々を心の中で願い続けてきた中国の戦線であった。

昭和一九年秋以降、八路軍の戦闘力はますます優勢になり、我が軍の状況が一日一日と不利になっていることはひしひし感じる毎日であった。

その状況のなかで我が部隊に異動命令が出て河北省の奥地〇〇県に大隊本部は位置して、それに所属する我が中隊はさらに奥地の〇〇鎮の警備の任にあたることになった。

四方山に覆われた深山幽谷の地で、これより前方に友軍なし、まさに最前線である。

この地区周辺は八路軍と一九路軍の根拠地とまでいわれ、敵側の重要地域とまで言われているところである。以前の警備地のように中国保安隊の協力もない。抗日運動の激しさが手にとるようにわかる。民家の土塀という土塀には、「打倒日本帝国」「東洋鬼子」「西洋鬼子」と抗日宣伝の内容が書きなぐられている。

住民の姿も一人として見ることができない前警備地域とはまったく雲泥の差である。また、所要道路、部落の入り口、至る所に地雷が埋設されてある。毎日どこかで地雷の爆発音を聞かない日はない。したがって我々は警備地域より一歩も外に出ることはできない。毎日が籠城生活そのものである。八路軍は我が軍の弱点をついて大夜襲をかけてくる。まさに今にも陣地を乗っ取られるような大激戦もあったが、かろうじて死守することができたこともあった。この戦況悪化の中で、敵の攻撃を抑えるべく陣地の正面部落を攻撃することになったが、敵は我が中隊の戦力などを充分把握している。そしてもっとも我々の恐れている地雷戦で抵抗をしてくる。まったく無謀な戦闘だと知りながらの行動である。各小隊散開体制を取り目的地三〇〇mまで前進、さらに一〇〇m近くまで接近したが、敵の抵抗なし。その時第一小隊長の伝令がとんできた。

各分隊長小隊長の下に集合せよとの伝令だ。何事ならんと匍匐前進、遮蔽物を利用して、小隊長の下にかけつける。

小隊長は悲壮な決意を顔面にみなぎらせながら、これより第一小隊は前方部落に突撃を敢行する。右より第一分隊、第二軽機分隊（我が分隊）、第三分隊、第四分隊、横一線、第五敵弾筒分隊は位置を選定し、掩護射撃、我が小隊の突撃を可能にせよ。分隊長は直ちに分隊員を掌握して準備完了の報告せよ。

以前夜間に部落に突入したことを思い出した。戦闘あるごとに願い続けてきたがむなしく、二度目の突撃だ、いよいよこれで終わりかもしれない、敵の攻勢は火を見るより明らかだと思ったが命令には如何ともしがたい。

分隊員を窪地に集めた。長以下八名の分隊である。その時点で分隊員に何を指示したのか記憶を辿ってみると、

「みんなよく聞け、これより第一小隊は前方の部落に突撃を決行する。右より第一分隊、我が分隊は部落の正面突撃の任務を受けた。敵の激しい抵抗は今の状況を見る限り間違いないだろう」「どんな事態が起ころうと分隊長命に従って行動せよ。たとえ敵の応戦なくとも勝手に家屋に侵入したりするな」「突撃に際しては一人一人の

間隔を広くし絶対に固まるな」「部落内に地雷の埋設、それに引き地雷で敵は待ち構えていることは明らかだ」。特に補充初年兵の戦闘が初めての彼に「分かったか」と念を押した。「鉄兜の紐を締めろ、巻脚絆の点検せよ…」。

喉はカラカラになっているが大声張り上げて「第二分隊突撃準備完了…。小隊前へ…、約五〇mまで接近。さらに前進…、着け剣、敵の応戦なし、さらに前進…」。小隊長声を振り絞り「突撃に…」後は聞こえない。

「わあー、第一小隊の一斉突撃…」

予想に反し敵の銃声なし、まったく応戦なし、地雷の爆音がはるかに遠くしている。敵の戦略にかかっているかもしれないと思った。八路軍の戦略は強いと見たら去る、無駄死にはしない。弱いと見たら徹底的に交戦してくる。彼らの戦略にはまりよく失敗をしてきた。

いずれにしても分隊の異状有無を点検して第二分隊異常なしの報告をする。この敵の応戦なしの突撃に再び夜間突入のことを思い出し我が分隊員の無傷。「ああよかった」「助かった」。なんとも表現することできない喜びが体中に脈打つ、その矢先、「Aがおらんぞー」。Aは三年兵である。この無風状態の突撃の中で、Aが消息不明とは。付近を捜索したがついにAの姿を発見することはできなかった。

過去の戦闘で行方不明になった兵はいるがそれなりに理由のつくものであった。今回の無風突撃のなかで行方不明の兵士が出るとは…。突撃の際に残ったとも考えられない。敵側に拉致されたとしても不思議な状況下である。敵前逃亡などさらに考えられない。戦後五三年を経るなかで私の忘れることのできない謎の一つである。彼の戦闘詳報がどのように記されているか敗戦のなかで知るよしもない。もしも彼が拉致されて保護されて無事に敗戦後帰国していてくれたらと思うが、私の耳には入ったことはない。戦友からその噂も通知もない。たとえ帰国することができなくても中国のどこかで、元気にいてくれればと、願い祈るこの頃である。

戦後五三年の今日、敗戦前の最後の突撃はあの無風突撃、それは私の命を永らえ生涯のいく道をかえ、八一歳の今日まで生を永らえている。

若くして戦死をしていった戦友の霊に対し心より冥福を祈り続ける。

一九九八・一二月記

紹介

湯浅　晃『戦後京都労働運動の歴史』（かもがわ出版、一九九九）

岩井　忠熊

著者は京都市高教組委員長、統一労組懇代表委員、京教組委員長、京都総評議長等を歴任した労働運動家であり、また京都市長選挙や参議院選挙（比例区）で日本共産党候補者として活動した政治家でもある。

本書の内容は、第一章戦後労働運動の出発と発展、第二章戦後第一の反動期の労働運動と京都の民統運動（蜷川民主府政の誕生）、第三章春闘開始から勤評・安保の大闘争への発展、第四章六〇年安保以後のきびしい分裂攻撃のなかでの労働者・国民のたたかい、第五章ベトナム侵略反対・大幅賃上げの全国統一ストライキと冨井民主京都市政の誕生、第六章七〇年知事選挙をはじめとした労働者・府民のたたかいの前進、第七章七〇年代中頃の労働者のたたかいの発展―特に民主的教師論と自治体労働者論―、第八章自民党府政と七〇年代末の労働者のたたかい、第九章同盟主導の労働戦線の右翼的再編の開始とこれにたちむかう統一労組懇運動、第一〇章臨調・行革路線によるはげしい攻撃と国鉄の分割・民営化反対のたたかい、第一一章労働戦線の右翼的再編の進行と階級的ナショナルセンター結成のとりくみ、第一二章全労連と連合の結成、第一三章京都における労働戦線の右翼的再編の攻撃と京都総評のたたかうローカルセンターへの発展、第一四章まとめ、から成り立っている。

本書はもと京都労働者学習協議会の機関誌「学習新聞」への連載を一冊にまとめられたものである。したがって文章は平易で明快である。著者は戦後京都の労働運動を身をもって体験した人物であり、ところどころに著者自身も登場している。見ようによっては客観性を欠くという意見も出るかもしれないが、常に労働運動の潮流の中にあっておのれの信ずる道を歩んだ著者の立場を思えば、むしろそこにこそこの書物の存在理由

を認めるべきだろう。そこで著者のめざしたものはあくまでいわゆる「公平」な運動史の平板な叙述ではなく、運動のあるべき姿を階級的な労働組合運動のナショナルセンターとローカルセンターの確立に見出そうとする姿勢を一貫させるところにあるからである。

各章はまたそれぞれの内外情勢の特徴から書きはじめ、京都の運動におよんでいる。労働運動に深いかかわりをもたなかった読者も、そのような情勢の記憶をよびおこされ、それぞれの時期の課題との関係に思いおよぶことだろう。その意味ではただ労働組合運動の関係者たちだけでなく、もっと広い層の人たちによっても読まれることが望ましい。

なお本書はかなり詳細な年表を付している。本文の主要部分とともに典拠とする資料をあげてほしかった。またさらに学習を深めようとする者のために適切な参考文献もあげてほしかった。著者はこの書物に利用できなかったさらに多くの資料類を持っておられるそうである。将来それら資料を活用した上でさらに定本的な戦後京都労働運動史を完成されることを切望してやまない。

総会報告

二回に分けて総会の報告をさせていただきます。

【一九九八年度決算報告】

一九九八年四月一日
～一九九九年三月三一日

収入項目	収入金額	支出項目	支出金額
前期繰り越し	632841	116号印刷費、消費税	51450
会費納入口数　168口	637000	117号印刷費、消費税	51450
カンパ	6905	118号印刷費、消費税	51450
例会、総会など		119号印刷費、消費税	51450
雑収入　郵便貯金利息	1010	120号印刷費、消費税	51450
		121号印刷費、消費税	51450
		編集費	6000
		発送費	175580
		事務費（封筒など）	11445
		振替払込料	10070
収入合計	1277756	支出合計	511795
		次期繰越（郵便貯金）	765961
合　計	1277756	合　計	1277756

【会計監査報告】

会計は正確に処理されております。会費の納入も順調であり、支出は会誌の発行が年六回とされ定期的に出版されていて極めて合理的に行われている。

結果、今年度の決算内容は、次期繰越額を一三三、一二〇円増加させて決算することができ、健全な財政状況となった。

支出額五一一、七九五円を上まわる会費納入額六三七、〇〇〇円があったからで、会誌の内容、定期出版化が充実したことによる反映とみてよい。

一九九九年四月一一日　蓮佛　亨

編集後記

国連決議によらないNATOのユーゴ爆撃の後に、コソボ地域からのユーゴ軍撤退、NATOとロシア軍の進駐が進みつつある。二一世紀を前にこのような困難な事態をつくりだした主要な責任が、アメリカの世界戦略にあることは明白である。

そのように無法なアメリカに事実上は有事の参戦を全面委任したに等しい日米ガイドライン法案、さらに盗聴法が国会を通過し、今また日の丸・君が代の国旗・国歌法案が国会に提出された。自・自・公連合体制のおどろくべき動向である。一九四〇年、近衛内閣期に日独伊三国同盟が成立し、新体制のかけ声のもとで、戦争遂行のための諸懸案が一挙に実現した。その苦い歴史をくり返さないためにこそ、民主運動の歴史もまた声高く語られねばならない。会員の皆さんの積極的な投稿をお願いする。

会および会報については、左記へご連絡ください。
〔事務局〕
〒六〇五―〇九五三
京都市東山区今熊野
南日吉町三九　奥村和郎
TEL
FAX〇七五―五六一―七四八五